主日礼拝１１月１３日（日）
題　「 神によって生きる希望　」
テキスト：ルカによる福音書２０章２７～４０節

　皆さん、おはようございます。
去る１１月８日（火）には、皆既月食が見れました。ご覧になった方も多いと思います。夜空を見る人々で賑わったと思います。わたしもその一人でした。テレビでも観れましたし、ＳＮＳでは月食の写真が沢山 up されていました。
　また今回は、惑星の天皇星食もあったということです。つまり、今回は地球と月と天皇星、三つが重なり合ったのです。この現象は４２２年ぶりと言うことです。日本では織田信長の生きた時代で、「信長も観ただろうか？」と
言われたようです。ちなみに次回は、３２２年後に、地球と月と土星が重なるとのことで、観れることなら天から観たいものです。

さて、今日の聖書の個所の小見出しには、「復活についての問答 とあります。
「 27:さて、復活があることを否定するサドカイ派の人々が何人か近寄って来て、イエスに尋ねた。」
サドカイ派というのは、イエスが生きておられたおよそ２０００年前の
イスラエルの国の宗教、ユダヤ教の主流を占めるグループの一つで、主に祭司階級でした。イスラエルの中心地のエルサレムの神殿に仕え、制度を重んじ現在で言えば、政治家でした。もう一つの多きなグループはファリサイ派で、聖書、その時代は旧約聖書、特にモーセ５書と言われる、旧約聖書の最初から５番の書物まで、つまり創世記、出エジプト記、レビ記、民数記、申命記の５書を重要視して、それの専門家、学者及び民の指導者グループでした。
イスラエルの民からも尊敬されていたのです。

この二つのグループは神殿を中心とする政治では関係が悪く対立関係にあったようです。二つとも社会の特権階級でした。しかし、この対立していたグループが、やがてイエスを十字架につけることに対しては、協力し合ったのです。今日の話しの関係で言えば、ファイサイ派は、復活を信じるよう強く人々に教えていました。しかし、サドカイ派は、復活を信じず、拒否していたようです。現世を重んじていたのです。

　そこで、今日のような出来事があったことを聖書は伝えているのです。
ここからの話は、サドカイ派のイエスに対するいじわるというか、嫌がらせの

ように思えます。今日の聖書個所の前には、信仰的なエリートを自他共に認めていたファリサイ派の人々がイエスを問い詰めようとして反対にイエスからやりこめられたことが記されています。その事を聞いて、今度はファリサイ派と対抗していたサドカイ派の人々がイエスの所にやって来たのです。

サドカイ派の人々がイエスに言いました。

28:「先生、モーセはわたしたちのために書いています。『ある人の兄
が妻をめとり、子がなくて死んだ場合、その弟は兄嫁と結婚して、
兄の跡継ぎをもうけねばならない』と。

このようなことは、古代ユダヤ、イスラエルの社会では実際にあったのです。このような婚姻制度はレビラート婚と言われています。レビラートとは、ラテン語で「夫の兄弟」を意味します。旧約聖書の創世記３８章８節や申命記２５章５節にもあります。古くは日本にもあったのではないでしょうか。

このような習慣は、世界でも、男性を中心とする家父長制度の強い国々や地域にあったようです。現在でもアラブ地域のベドウィン族の間に残っていると言われます。男性の血筋を絶やさないという考えから出て来ているのです。

今日の個所でのサドカイ派の人々のイエスに対する話は、イエスを苦しめるためにもち出していると思えます。実際には「復活はないのだ。」ということを言いたいのです。自分たちと対立していた「復活はある。」と信じていたファリサイ派とイエスを分離させたいとのもくろみもあったと思われます。

「29:ところで、七人の兄弟がいました。長男が妻を迎えましたが、子が
ないまま死にました。
30:次男、
31:三男と次々にこの女を妻にしましたが、七人とも同じように子供を
残さないで死にました。
32:最後にその女も死にました。
33:すると復活の時、その女はだれの妻になるのでしょうか。七人とも
その女を妻にしたのです。」

このような極端なことを言ってイエスを苦しめようとするのです。

サドカイ派もファサイ派も何とか、イエスを陥れようとしていたのです。

しかし緊迫した中でもイエスは落ち着いて堂々と語っておられます。

34:イエスは言われた。「この世の子らはめとったり嫁いだりするが、
35:次の世に入って死者の中から復活するのにふさわしいとされた人々
は、めとることも嫁ぐこともない。

次の世、つまり天国では「めとることも嫁ぐこともない。」

どのような人が復活に与るのかは人間は決めることはできません。それは神さ

まの専権事項なのです。
ただ言えることは、「次の世」つまり神の支配される、天国では、この世の制度、しきたりは通用しないということだと思います。
むしろ、
36:この人たちは、もはや死ぬことがない。天使に等しい者であり、
復活にあずかる者として、神の子だからである。」と。
「もはや死ぬことがない。」という言葉は、他の聖書の訳では「死ぬことができない。」と訳されています。それは天使に等しいものだからと思わされるのです。
「この人たちは、」とは、神の支配下にはいる人たちと受け止めます。
「復活にあずかる者として、神の子だからである。」この個所は「復活の子なのですから、神の子となるのです。」との訳もあり、つまり「光の子となるのです。」。そう受けとるとうれしくなりました。死後の世界においての、この世での人間関係のいざこざへの不安が消え、少し明るく感じることができるような気がします。すべてが愛なる神さまの光に照らされているのです。ここでイエスは「復活はある」ということを当然のことのように認めておられます。このイエスの言葉は「復活はない。」と信じ言い張っていたサドカイ派の人々の胸には痛く響き、イエスに対する敵意すらもたらしたでしょう。逆に復活を信じていたファイサイ・律法学者の人々は、我が意を得たりと思ったことだと想像します。その証拠にこの後の３９節では
それまでイエスに反感を持っていたファイサイ派・律法学者の中には「先生、立派なお答えです」と言う者もいたとあります。イエスが復活を認めたと思ったからです。

　わたしは今日の聖書個所を何度も読んで来ましたが、長く、「:神は死んだ者の神ではなく、生きている者の神なのだ。」とのことばを。聖書の神さまは生きている者の神で、死んだ人たちはもう神さまにお任せしておけばよいのだと受けとっていました。それも一理あるとは思いますが、今回新たに気づかされたことがありました。それは「すべての人は、神によって生きているからである。」という言葉。この言葉は、今生きている人だけではなく、すでに次の世、天に移った人たちも、「すべての人は、神によって生きている。」ということ。その言葉の深みと言葉の重みです。
創造主なく神の広大さと深遠さ、そして憐みの深さです。
愛なる神にとっては、共にあるすべての者が生きているのです。
すべての者が生かされ生きているのです。地上の生を終えて天に召された古代のアブラハムもイサクのもヤコブも、今も神によって生きているということで

す。
　もちろん天に召された方々は肉眼の目には見えませんが、神によって生きておられるのです。今回、このように受け止めることのできることを感謝しています。
　ベンヤミンというドイツ人の現代の哲学者は、わたしの記憶によれば「過去、地上に生きた無名の人々を寄せ集めれば天上に星座ができる。」と言ったと聞きました。まさに「すべての人は、神によって生きているからである。」を思わされます。光は放たれているのです。そのことを覚え感謝しながら共に残された地上の歩みを「神によって生きる希望」を持って歩みたいと願います。

　主の平安を祈ります。